

主婦の職業威信の検討

肥和野 佳子

本稿は階層研究において主婦をどう評価するかという問題を提起し、これまでの研究を参考に、主婦の職業威信をいかにとらえるかという可能性を探ることを目的としている。従来、女性は社会階層研究の中で研究対象とされることがまれであった。しかし近年女性の社会進出が高まってきており、階層研究において女性を組み入れることが必要となってきた。その際、主婦をどう評価するかということが問題となっている。主婦の職業威信を考える場合、主婦を夫の職業的地位にかかわりなく、一つの独立的な職業と見なす考え方があ

るが、夫の職業的地位を考慮した研究が今後望まれる。

1. はじめに

社会階層研究では、従来、研究者は主として男性のみを研究対象とし社会学理論を組み立ててきた。家族を階層システムの単位とし、家族の社会的地位は男性世帯主により決定されると仮定してきた。すなわち、女性は女性自身では地位を持ちえず、属している男性によってその地位が決まるとされてきたわけである。しかし、女性の社会的進出が進みつつある今日、女性が男性を通してではなく、職業を持つことによって独自の階層的地位を所有する度合いが高まってきている。また、家族形態の多様化も進み、単身生活者や男性世帯主を持たない家族が増大している。社会の現実をより正確にとらえるためには、家族を単位とするにしても個人を単位とするにしても、階層研究において女性を研究対象に組み入れる必要がある。そこで、女性を階層研究に組み入れるさい、様々な問題が生じてくる。なかでも主婦⁽¹⁾(専業主婦)をどう評価するかということが大きな問題となってくる。主婦をどう評価するかという問題については国際的にもまだ一致した見解は見られない。しかし、主婦を一つの職業とみなし、他の職業と比較することによって主婦の職業威信を測定する

ことが最近アメリカを中心に行なわれつつある。この主婦評価の問題を解決することは、社会階層と社会移動の研究にとってのみならず、職業研究にとっても大変重要であり、また、女性の職業志向や職業選択行動の研究にも大いに影響を与えるであろう。本稿は、階層研究において主婦をどう評価するかという問題を提起し、それに関するこれまでの研究を参考に、主婦の職業威信をいかにとらえるかの可能性を探る試論である。

2. 社会的地位と女性

A. 主婦を他の職業と比較することの意味

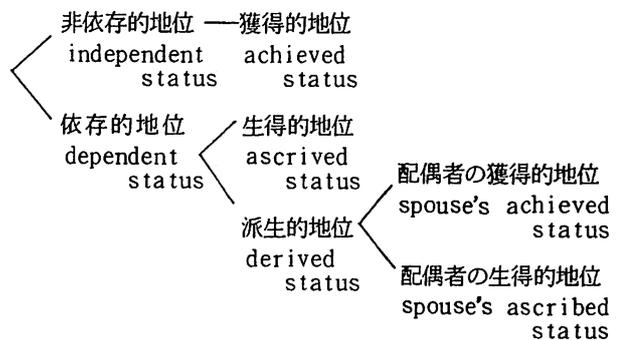
社会的地位の概念を直井優は「人びとの欲望の対象であるさまざまな社会的資源とその獲得機会が、不平等に分配されている状態」、「社会的に不平等に基づく人びとの序列づけ」と定義している⁽²⁾。ここで、社会的資源とは、(i)物質的資源、(ii)関係的資源、(iii)文化的資源の三つのカテゴリーからなるとしている。そして、このような多元的概念である社会的地位を規定する一つの要因として職業をあげ、職業によって規定された地位を「職業的地位」とよび、職業的地位を「職業の異質性に

よってもたらされる社会的な不平等に基づく人びとの序列づけ」と定義している⁽³⁾。具体的には、個人の全体的な社会的地位についてM. M. Tuminは次のように述べている。「我々は社会関係において互いに判断したり、評価したり、尊敬をもって受け入れられるかを決定したりする際には、職業、収入または教育程度などのみを考えるわけではなく、むしろ、これらの要素とさらに別の要素、すなわち性別、年齢、肌の色、宗教、出身国、結婚上の地位、家族的背景などを混合し判断し、我々は何らかの全体的な得点を計算する。」⁽⁴⁾

このように、社会的地位は複合的なものであり、職業的地位は社会的地位を規定する一つの要因にすぎない。前近代社会では生まれながらの属性が重視されていた。しかしながら、近代産業社会においては業績主義的価値に基づいた職業が社会的地位の代表的なものとなさされている。それは、職業は人々に様々な社会的な不平等をもたらし、人々を階層化する事実上の機能をもっていると考えられているからである。そして、これまでの社会的地位の研究は業績的な属性をとりあげ、職業的地位を中心に論じられてきたわけである。

しかし、本来、社会的地位は複合的なものである。個人の努力や競争によって獲得され、個人の業績に基づく獲得的地位(achieved status)と、誕生とともに社会的に付与される生得的地位(ascribed status)についてはこれまでも論じられてきたが、ここで私が加えたいのは結婚によって付与される派生的地位(derived status)という概念である。私は派生的地位を配偶者を通して得られる地位と定義する。狭義では、配偶者の職業的地位、職業威信を通して得られる地位と定義する。派生的地位という言葉はdependent statusとかborrowing statusというふうにも表現されており、アメリカの社会学者の間ですでに使われているが、社会的地位との

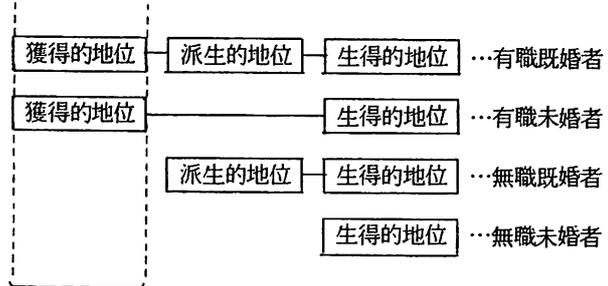
図 1.



関係を明確にされないまま使われている。

そこで私は次のように考えたい。図1のようまず、人には、本人の業績に基づく非依存的地位(獲得的地位)と、本人の業績以外のものに基づく依存的地位がある。本人の依存的なものには大きく分けると、生まれながらの生得的地位と結婚によって付与される派生的地位がある。派生的地位は本人の業績的なものを、いわゆる「内助の功」として配偶者を通して間接的に表すことはあるが、本人の業績を直接表すものではなく、その意味で獲得的地位とはいえない。派生的地位の中にはさらに配偶者の獲得的地位と配偶者の生得的地位とがある。このように、人は主として獲得的地位、生得的地位、派生的地位の3つのレベルのstatusを有することが可能である(図2参照)。

図 2. 社会的地位を構成する3つのレベルの地位



職業的地位を測定することで見ているところ

生得的地位は生まれながらに誰でもが所有している。しかし獲得的地位は職業の有無によって所有してい

る人と所有していない人がおり、派生的地位も配偶者の有無によって所有している人と所有していない人がいる。こうした中で、職業的地位をもって社会的地位を代表することは多くの人を見落とすことになる。このことが階層研究における女性の不可視性とつながっているのである。職業を持つ女性が増大したとはいえ無職の主婦は未だ多く存在している。職業を持たない人々を分析の対象にいれることは重要である。

しかしながら、実際面を考えると、社会的地位の分析に、獲得的な属性の他に生得的な属性と派生的な属性を加えることは分析をあまりにも複雑にするだろう。そこでやはり職業を代表とする獲得的な属性を社会的地位の主たる要因とし、生得的な属性はとりあえず考慮しないこととし、職業を持たない者については派生的な属性で代替させることが現実的な方法ではないだろうか。職業も配偶者も持たない人はそれでも分析から抜け落ちてしまうが、実質的にはほとんどの男性は職業を持っているので、これによって主婦という無職者のマジョリティーをとらえることができよう。たしかに、職業は獲得的なものであるが、主婦というポジションは派生的なものであり、本来別の次元のものである。しかし、社会的地位はそれらの要因の複合的産物であるから、主婦を職業にかわるものとして仮に取り上げるのである。

また、主婦という仕事の内容を考えても、賃金は支払われないものの、確かに主婦は実際にエネルギーを消費し、様々な財やサービスを作り出している。イリイチの言うところのシャドウ・ワークをしているわけである。法律的にも主婦の経済的価値は認められている。たとえば、主婦が事故で死亡した場合は逸失利益の補償として、全女子労働者の平均賃金をもとに損害賠償額が算出される。また、主婦の経済的価値は社会的にも認められつつあり、最近、保険会社が行なった主婦の家

事労働の算定によると、小学校就学前の子供がいる主婦は、1か月209,315円、小学校就学前の子供がいない主婦は、1か月167,126円の賃金価値に相当するとされている⁵⁾

以上のような意味において、主婦を職業にかわるものとして考え、主婦を他の職業と比べるのである。

B. 職業威信について

威信は他者の尊敬や賞賛、信服の感情的反応を基盤とする心理的映像の次元で成立する。職業威信とは、職業についての、他者によって承認された差別的評価に基づく社会的勢力であり、ある社会の成員が共通して承認している職業についての評価の序列である。職業威信は職業威信スコアによって量的変数として尺度化される。現在、職業威信の測定方法として用いられているのは主観的方法である。主観的方法とは人々の職業に対する主観的な評価に関する調査データを利用して、尺度化するものである。具体的には、調査者が、いくつかの代表的な職業名を選び、それを調査対象者に何段階かのカテゴリー（高い、やや高い、…低い）に評定してもらい、それに評定値を与える。その評定値の平均値をもって、その職業の威信の高さとする。最近アメリカを中心に行なわれつつある主婦の職業威信の測定についても同じような方法が用いられており、主婦を一つの職業とみなし、他の職業と比較することによって主婦の職業威信を測定している。

ここで職業威信を考えると注意しなければならないことがある。それは、従来の社会学者が職業威信をSEX-NEUTRALなコンセプトであると仮定してきたことである。これまで、職業威信尺度は主として男性用に作られてきた。こうした職業威信尺度が女性にも有効であるかどうか問題がある。同じ職業についていても男性と女性とで

同じ職業威信を得ているとは限らない。たとえば、男の図書館司書と女の図書館司書は同じ職業威信であると言ってよいのか、男の事務職と女の事務職は同じ職業威信であると言ってよいのかということである。特に、性別でステレオタイプ化された職業については、職業威信はSEX-NEUTRALなコンセプトとはいえないことが Bose(1973, 1983)や、Jacobs & Powell(1984, 1985)の研究から明らかにされている。主婦を他の職業と比較する場合も、その職業についている人の性(S EX OF INCUMBENT)に注意しなければならない。

3. 主婦の職業威信の測定(アメリカにおける研究)

初めて主婦(housewife)の地位を測定したのは Clara Menger(1932)である。彼女はそもそも女子の職業選択に関心があり、職業の社会的評価が職業選択の重要なファクターであることを知っていた。そこで女性の職業の社会的評価を明らかにしようとした。そして女性の職業のランキングを作る際に、主婦を一つの職業として他の職業といっしょに入れたのである。彼女は男女合わせて704人の調査対象者に35種の職業について、1番から35番まで順位を決めさせる方法で職業のランク付けの調査を行なった。このとき、その職業に従事しているのは女性であることが前提とされていた(すなわち incumbentの性は女性であった)。表1からわかるように、主婦は35種の職業中16位である。そして主婦の得点のレンジが他の職業に比べてはるかに大きく、評価にばらつきが大きいことがわかる。

Menger以降、1970年代に至るまで、女性の職業の社会的評価が研究されることはまれであり、主婦を一つの職業としてみることはタブーとなっ

表1. 社会的地位から見た女性の職業の序列

職業	メディアンスコア	順位	レンジ
医師	2.4	1	2.7
弁護士	2.9	2	3.0
歯科医	3.9	3	4.8
高校教師	5.5	4	3.8
小学校教師	7.9	5	5.8
秘書	9.4	6	6.1
栄養士	10.7	7	7.8
看護婦	11.3	8	8.2
仕入係, バイヤー	11.4	9	7.9
ソーシャルワーカー	11.5	10	10.0
図書館司書	13.0	11	6.1
音楽家	14.3	12	10.2
女優	14.6	13	13.0
人事管理者	14.7	14	10.1
簿記係	15.4	15	7.5
主婦	15.6	16	20.9
商店店主	15.8	17	7.8
速記者	16.7	18	7.6
コンピュータオペレータ	18.5	19	8.0
事務員	19.2	20	7.0
タイピスト	19.7	21	7.9
販売員	21.9	22	7.4
婦人帽子屋	23.2	23	5.9
電話交換師	23.7	24	8.3
裁縫師	23.9	25	7.7
美容部員	24.22	26	6.4
モデル	24.23	27	8.7
会計係	25.5	28	7.5
料理人	29.5	29	6.4
工場作業員	29.7	30	6.1
ウェイトレス	30.7	31	4.1
メイド	30.8	32	4.1
家事雑役婦	31.5	33	3.2
洗たく女	33.6	34	2.7
ゴミ掃除婦	35.0	35	0.9

Menger (1932) P. 700 Table 1より

ていた。この間、社会階層と社会移動の研究は、理論的にも方法論的にも飛躍的に発展し、Blau & Duncan(1967)のかの有名な著作‘The American Occupational Structure’が生まれた。しかし、これは当時、全雇用者の5

分の2を女性が占めていたにもかかわらず、男性に関するデータのみによって、それをアメリカ社会全体の階層構造や職業構造の型として一般化しようとする傾向があった。1960年後半から1970年代に入ると、フェミニズムの波が高まり、アカデミズムにおいても男性中心性が非難され、女性の不可視性が叫ばれるようになった。社会階層研究における女性について、この時、強いインパクトを与えたのは、Joan Acker(1973)であった。Ackerは従来の社会学者が一般的にいただいている女性の階層的地位に関する仮定を打ち砕く問題提起をした。例えば、従来、階層システムの基本的単位は家族であるとされており、家族の社会的地位は男性世帯主の地位によって決まり、女性の地位はその夫の地位と同じであるとされてきた仮定に対して疑問を投げかけ、単身生活者や男性世帯主を持たない家族の存在を指摘し、ある職業についている男性の妻は、その職業的地位より一般的に低い位置づけをされる現実などを指摘した。彼女の問題提起は、階層研究において女性をどう取り扱うべきかという指針となり、その後の社会的地位と女性に関する研究の礎となるものであったと言えよう。そして、こうした視点が、主婦をどう評価するのかという問題にも発展してきたわけである。

Catherine Arnott & Vern L. Bengtson(1970)は相対的剥奪に研究関心を持っていた。そして、高い教育を受けた女性は、無職の主婦であることに相対的剥奪感を感じ、そういう女性は、職業を持つことを選ぶという研究結果を出した。この調査の際に、相対的剥奪感をきく項目の他に、主婦の職業的地位を問う項目が加えられた。調査対象は高等教育を受けたミドル・クラスの女性178人で、主婦を含む20種の職業を6段階で評価させる方法が取られた。主婦のランクは20種の職業のなかで中位であった。

Cristine Bose(1973, 1980, 1983)は職業威信におけるsex differencesに関する詳細な研究を行なった。Baltimoreに住む地域住民と大学生男女397人を調査対象とし、主婦と年金生活者を含む110の職業を9段階で評定させた。この時、職業名はその職業についている人(incumbent)の性がわかるようにくふうされた。男の名前と職業名が書かれたカードと、女の名前と職業名が書かれたカードと、半分は男性の半分は女性の名前が書かれたカードと、男女どちらとも告げられず、職業名だけ書かれたカードをそれぞれ110枚ずつ4セットづくり、調査対象者を4つのグループに分けて評定させた。そしてincumbentの性の違いが職業威信スコアにどのように差異をもたらすか、また評定者の特質が職業威信スコアにどのように差異をもたらすかを調査した。そしてそのなかで主婦(housewife)と主夫(househusband)の職業威信も測定した。主婦は110種の職業中45位で、0~100スケール(1971年SiegelのNORCプレステージ・スコア)で51ポイント(average jobは45ポイント)であった。女性は高い威信を持つ職業につく割合が低いので51ポイントというのは職業全体としては中位であるが、女性がつく職業としてはやや高い方になる。しかし一方、主夫は110種の職業中100位で、わずかに15ポイントでかなり評価が低くなっている。こうしたincumbentの性差が職業威信に影響を与えるのは特にsex-stereotyped jobにおいて顕著である。全体としては、incumbentの性差が職業威信に与える影響は小さいが、職業における男女の構成比率がいくつかの職業における職業威信に影響することを彼女は明らかにした。また、Boseは主婦の役割を細かく分けて、労働市場でそれに相当するそれぞれの職業を取り上げ、それぞれの職業の威信の平均値を出し、主婦そのものの威信と比較した(表2参

表2. 主婦の業務にあたる職業の威信スコアの平均

職 業	威信スコア
寄宿舍のまかない人	24
ハウスキーパー	25
メイド	12
洗たく人	15
裁縫師	28
料理人	22
おかしづくり職人	39
ウェイトレス	22
美容師	39
配達車運転士、おかかえ運転士	27
ベビーシッター	18
小学校教師	65
ソーシャルワーカー	63
付添い看護婦	56
管理アシスタント	68
上記職業の平均	35

Bose (1980) P. 77 Table 1より

照)。それによると、主婦の役割にあたる職業の威信の平均値は35ポイントで、実際に主婦に与えられた51ポイントより16ポイントも低い。Boseはこの16ポイントを主婦に与えられたボーナスと表現しており、主婦の地位がこのように高いのは子育てやmotherhoodのためではないかと言っている。また、評定者の特質との関係について、年齢の高い人、世帯主の地位の高い人、主婦の人は主婦を高く評価し、既婚の人は主婦を低く評価する傾向のあることを明らかにした。

Rosalind J. Dworkin (1981)は、Duncanの社会経済的地位指標から10組20種の職業を取り上げ、それと主婦とを比較してどちらが高いか低いかを調査対象者に尋ねるという方法で、おおよその主婦の職業威信を測定した。調査対象者は女性501人で、incumbentの性は告げられなかった。そして、主婦は“sales clerk and nurse”と同程度という結果を得ている。これは、方法は異なるがBoseの調査結果と大変似た結果である。

Mengerの場合も、Arnott & Bengtsonの場合も、Boseの場合も、そしてDworkinの場合も、それぞれの調査において、主婦の威信は夫の地位の高低にかかわらず、主婦という活動そのものに対して問われた。しかし、実際、主婦の評価は他の職業に比べてばらつきが大きい。高く評価する人もいれば低く評価する人もいる。そもそも主婦という立場はachieved statusではなくderived statusである。夫から派生する威信というものが主婦という仕事の内容のほかに影響力をもっているからではないだろうか。

Linda B. Nilson (1976, 1978)は主婦を他の職業と比較して一般的な主婦の威信を測定する調査に加えて、それぞれ異なる職業についている夫を持つ主婦の威信も測定した。調査対象はMilwaukeeに住む479人の男女であった。そのうち252人には主婦を含む17の職業を5段階で評定させた。この時incumbentの性は告げられなかった。そしてこれを1963年のHodgeのNORCプレステージ・スコアに計算し直し、主婦の威信は70ポイントという結果を得た。これはBoseの結果と比べて高く見えるが、同じNORCスコアといっても尺度が異なるためであり、Boseの結果より高いスコアであることを意味していない。それから、Nilsonは調査対象479人全員に、7人の主婦(夫はそれぞれ異なる職業についている)の地位について尋ねた。表3のように、主婦と言

表3. 夫の職業別主婦の威信スコア

夫の職業	夫の威信スコア	主婦	妻の威信スコア
医師	91	医師の妻	83
土木技師	81	土木技師の妻	75
小学校教師	72	小学校教師の妻	71
配管工	73	配管工の妻	64
簿記係	68	簿記係の妻	66
流れ作業者	58	流れ作業者の妻	59
ビルの管理人、 門番	54	ビルの管理人、 門番の妻	54

Nilson (1978) P. 545 Table 4, Total Sample Scoresより

っても夫の職業によってかなり評価に差があるという結果が出ている。そしてNilsonは、その主婦のスコアを回帰分析することによって、夫の職業的地位から主婦の地位を算定する回帰方程式 ($Y = 14.4 + .7469X$ Y;主婦の地位, X;夫の職業的地位)をつくり、主婦の地位はNORCプレステイジ・スコアでおよそ夫のスコアの4分の3に14を加えた値になるという結果を出した。また一方、Nilsonは職業をもつ既婚女性についても分析している。彼女は既婚女性の社会的地位を自分自身の職業的地位と夫の職業的地位の両方から測定することを試みた。本人の職業8種(主婦を含む)と夫の職業7種の組み合わせを56個作り、その既婚女性の地位の高低を5段階で調査対象者に評定させた。そしてNORCプレステイジ・スコアに計算し直し、表4のような結果を得た。これによって既婚女性については職業を持っている人も持っていない人もスコアの上で比較することができる。Nilsonはさらに既婚女性の地

表4 既婚女性の社会的地位の威信スコア

医 師	67	69	73	78	79	85	91	83
土 木 技 師	64	66	71	74	80	82	88	75
小 学 校 教 師	60	62	67	69	74	78	84	71
簿 記 係	54	63	66	70	73	72	79	66
配 管 工	58	60	68	67	69	71	76	62
流 れ 作 業 者	53	58	60	62	66	66	75	59
ビルの管理人, 門番	53	54	60	60	65	67	69	54
夫の職業 (妻の職業 本人)	ビ 人 ル の 門 番	流 れ 作 業 者	配 管 工	簿 記 係	小 学 校 教 師	土 木 技 師	医 師	主 婦

Nilson (1976. b) P. 588 Table 3より

位評価における本人の職業、夫の職業それぞれの独立効果を求めるために回帰分析を行なった。そして本人の職業の効果の方が夫の職業の効果よりやや高いという結果を得た。既婚女性の社会的地位を獲得的地位と派生的地位の両方を用いて測定

するところにNilsonの特徴があり、先駆的で大変興味深い。これは女性の地位についての研究であり、男性の地位に関しては何も語られていないが、彼女の方法は男性の地位についての応用も考えられる。今後、獲得的地位と派生的地位の両方を用いた個人の地位の男女比較もできるであろう。

4. 主婦の職業威信の理論上のモデル

以上のようなこれまでの研究結果を参考にして、主婦の職業威信を表す理論上のモデルを私なりに考えてみたい。まず、図3のように、女性の地位を1次元の直線で考える。その直線を構成する一つ一つの小さな点がそれぞれの職業である。

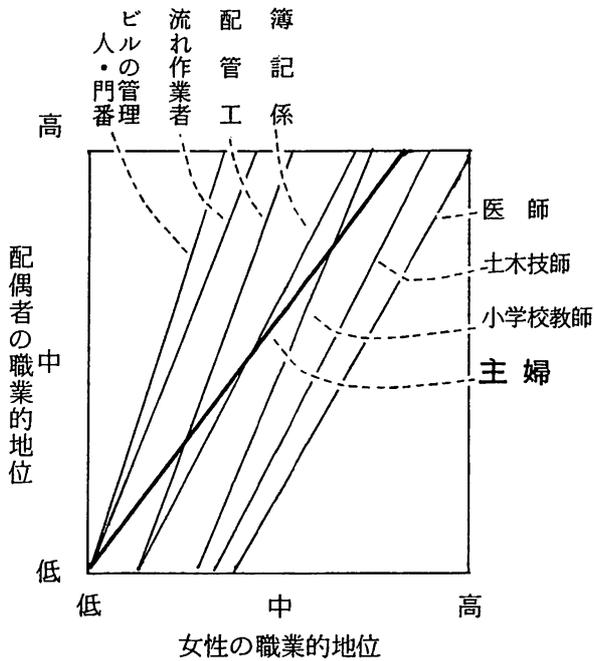
図3. 女性の職業的地位



そして主婦を夫の職業的地位とかかわりなく、一つの独立的な地位として見るとき、主婦の地位はその直線のなかの一つの点として表される。Boseらの研究結果によると主婦の地位は中位よりやや上程度の一つの点で表される。他の職業ももちろん夫の職業的地位とかかわりなく一つの独立的な地位としてみる。この場合、独身者はもともと派生的地位を持たないので問題はないが、既婚者は派生的地位を切り捨てるかたちになる。

これに対してもう一つのモデルでは、図4のようになる。これは既婚者にあてはまるモデルである。女性の地位を夫の地位を考慮して2次元上で考えるとき、主婦の地位は点ではなく線で表される。このことは主婦だけでなく他の職業についても同様で、それぞれの職業的地位は夫の職業的地位を考慮して、点ではなく線で表される。そのとき、線の角度はその職業によって傾きが違う。傾

図 4.

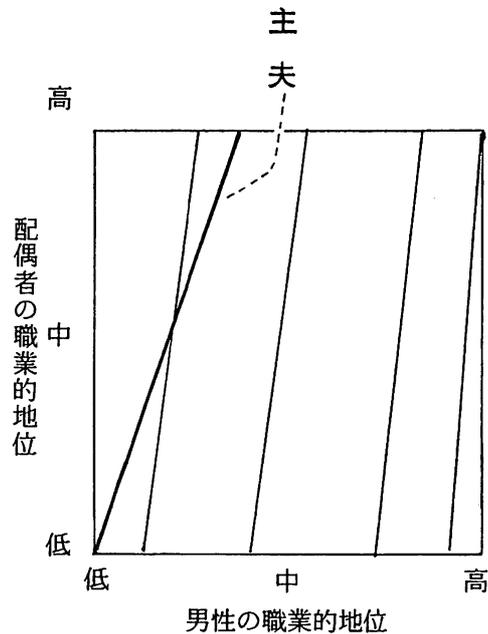


きの角度が大きいほど夫の職業的地位に左右されやすい職業ということになる。図 4 は、Nilson の調査結果(表 4)を表考にモデル化したものである。

図 4 からわかるように主婦は他の職業に比べて傾斜角度が大きい。すなわち、主婦という「職業」はその地位をそれだけ夫の地位に左右される程度が大きいということである。逆に言えば、女性は結婚していても自分自身が職業を持っていれば、自分の社会的評価は、夫の地位に、主婦ほどには左右されないということになる。

John G. Richardson & E. R. Mahoney (1981) は、獲得的地位と派生的地位の両方の情報を調査対象者に与え、それぞれの地位を評定させた。そして、女性の地位は夫の職業的地位に影響を受けるが、男性の地位は妻の職業的地位にそれほど影響を受けないという結果を出している。このことから、ちなみに、既婚男性のモデルを予想してみると、図 5 のようになる。男性の職業的地位は妻の職業的地位に左右される程度は小さく、

図 5.



直立的線に近い形で表されるであろう。

このように、男女とも、独身者の職業的地位については図 3 のモデルで 1 次元上の点として表すのが適切であろうが、既婚者の職業的地位については 2 次元上の線として表すのが適切であろう。主婦の職業威信も線で表されるということは、主婦を獲得的地位のレベルで他の職業と同じように、既定された一つのスコアに押し込めるのは適切ではないことを意味する。主婦はそもそも派生的性質をもつ地位であるから、その派生的性質を表すようなよたちで表現するのがよい。しかし、これをあえて、1 次元上の獲得的地位のレベル、限定的には職業威信のレベルに主婦を押しこんで表したいならば、主婦の漠然とした一般的な主婦としてその地位を評定させるのではなく、たとえば、夫の職業的地位を具体的に表した主婦を複数設定して、すなわち、主婦(建築家の妻)とか主婦(配管工の妻)とか、いくつかの主婦を設定して、評定させるのが、より適切であろう。

5. おわりに

これまで社会階層研究においては社会的地位を考える場合、職業的地位を中心に研究が進められてきた。近代産業社会においては、業績主義的価値に基づいた職業が、社会的地位の代表的なものとなされており、それは職業がそれだけ見えやすい、測定しやすいものであったからである。しかし、それでは職業を持たない者は階層研究においては「見えない存在」になってしまう。女性を分析する場合、主婦をどう扱うかが大きな問題である。主婦は本来職業ではない。しかし、女性を階層研究の中に組み入れるために、主婦を何とか「見える存在」に拾いあげたい。

主婦の職業威信を考える場合、一つには、主婦を夫の職業的地位とかかわりなく、一つの独立した職業と考え、主婦の職業威信を獲得的地位のレベルに準拠させて求める考え方がある。もう一つには、派生的地位という概念を使って、夫の職業的地位を考慮し、獲得的地位に準拠するレベルと派生的地位のレベルの2次元で求める考え方がある。主婦は本来派生的性質のものであるから、後者の考え方のほうが、主婦に対して向けられる現実の社会的評価を、より適切に反映するであろう。

今後、主婦の職業威信の研究は、まず研究者が、社会的地位を考える場合、派生的地位という概念

を確立し、主婦をどのレベルで考えるか、すなわち、主婦を獲得的地位のレベルに準拠させて考えるのか、あるいは、派生的地位を考慮した2次元レベルで考えるのかを研究の目的によって選択することになるであろう。

主婦の職業威信の研究は、主婦を獲得的地位のレベルに準拠させる方法では、ある程度研究成果が上がってきているが、派生的地位を考慮した研究は極めて少なく、まだ測定方法も十分確立されてはいない。派生的地位をいかに考慮するかは、主婦に限った問題ではなく、社会的地位を測定する場合の男女に共通する問題である。主婦の職業威信の研究は今後、社会的地位の研究の中で、派生的地位の測定と分析に研究者の目が向けられ、研究が進められる中で、平行して発展していくであろう。

注

- (1) 主婦とはこの論文の中では専業主婦を意味する。主婦の定義をA. Oakley(1974)は「女中ではなく、大方の家事任務(もしくはその任務を果たす女中の監督)の責任をもつ人。」としている。
- (2) 直井優(1979)「職業的地位尺度の構成」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会 p. 436-437
- (3) 直井優 前掲書 p. 436-437
- (4) M. M. Tumin(1964) *Sosial Stratification* Prentice-hall, Inc. 岡本英雄訳『社会的成層』至誠堂 昭和44年 p. 35-36
- (5) A I U保険会社 広報部資料 1986年

参考文献

- ACKER, J. (1973) "Women and social stratification: A case of intellectual sexism" *American Journal of Sociology* 78, 4: 936-945.
- ARNOTT, C and V. VENGTSON (1970) " 'Only a homemaker': distributive justice and role choice among married women." *Sociology and Social Research* 54, 4: 495-507.
- BLAU, P. M. and O. D. DUNCAN (1967) *The American Occupational Structure*. New York: Wiley
- BOSE, C. (1973) *Job and Gender*. Baltimore: Johns Hopkins University Center for

Metropritan Planning and Research.

(1980) "Social status of the homemaker." 69-87 in Sarah f. Berk (ed.)
Women and Household Labor. Beverly Hills : Sage.

(1983) "Gender and jobs : Prestige standings of occupations as affected by
gender" *American Sociological Review* 48, : 316-330

DWORKIN, R. J. (1981) "Prestige ranking of the housewife occupation." *Sex Roles* 7, 1
: 59-63.

JACOBS, A. and B. POWELL (1984) "The prestige gap : Differential evaluations of
male and female workers." *Work and Occupations* 11, 3 : 283-308.

(1985) "Occupational prestige : A sex-neutral concept ?" *Sex Roles* 12, 9 :
1061-1071.

MENGER, C. (1932) "The social status of occupations for women." *Teachers Collage
Record* 33 : 696-704.

NILSON, L. B. (1976 a) "The occupstional and sex related components of social standing."
Sociology and Social Research 60 : 328-336.

(1976 b) "The social standing of a married woman." *Social Problems* 23 :
581-592.

(1978) "The social standing of a housewife." *Journal of Marriage and the
Family* 40, 3 : 541-548.

OAKLEY, A. (1974) *The Sociology of Housework*. New York : Pantheon.

RICHARDSON, J. G. and E. R. MAHONEY (1981) "The perceived social status of
husbands and wives in dual-work families as a function of achieved and
derived occupational status." *Sex Roles* 7, 12 : 1189-1198.

直井 優 「職業的地位尺度の構成」富永健一編『日本の階層構造』 東京大学出版会 昭和54年 p. 434-
472

メルビン M. テューミン 岡本英雄訳『社会的成層』 至誠堂 昭和44年

(ひわの よしこ)